

歴史ある当院での心臓手術

術者としてその時の考えが伝わらねば、と思い手術記録を書く

もともとアメリカ、オハイオ州のクリーブランドクリニックで、人工心臓、重症心不全に関するデバイスの開発、左心、右心機能に関する研究に携わっていた事もある、先天性心臓病を専門にするとは思ってなかったのですが、2010年から当院の心臓血管外科の小児部門の責任者となり、手術をさせて頂いております。

当院の心臓血管外科では、昭和35年に低体温併用による直視下肺動脈弁交連切開術、昭和36年に人工心臓を用いて2才女子の心房中隔欠損閉鎖術を行ったという古い歴史があります。これは九州大学よりも先駆けて実施されており、

当時としては、まさにチーム努力の結晶の偉業であったと思います。当院での手術は、新生児から80歳代の成人心臓大血管手術まで非常にバラエティに富んでおります。昨年73歳の男性が、部分肺静脈還流異常、心房中隔欠損、僧帽弁、三尖弁の逆流があり手術になりましたが、なんとそのお孫さんは、さかのぼること27年前の1988年に当院において

1.8キロで総肺静脈環流異常症 (Ia) の手術を受けた方でした。送血カニューラには透析用のクランプキヤス16ゲージを用いたと手術記録に書いてありました。お孫さんが先に手術をしたわけですが、そのお孫さんの男性は現在、ほぼ健康常人の感じでお元気でした。私がまだ研究室にいる頃に学会会長をされていたような大御所の先生らが執刀された右心耳-肺動脈吻合フォンタン手術のTCPCへのconversion、ファロー四徴症の再々々手術、大動脈縮窄、離断の再手術などもあり、歴史を感じながら手術をしております。昔の先生らは難易度の高い手術をオフポンプでしたり、フォンタン手術にはもっていかず、大変な二心室修復を丁寧に根気強くされています。手術記録は、非常に几帳面でシエーマ、文章を自筆で書いてあります。私も、先人のお師匠の努力を振り返りながら、術者としてその時の考えが伝わらねば、と思い手術記録を書く様にしております。



落合由恵

所属：JCHO九州病院 (旧：九州厚生年金病院) 心臓血管外科・部長 (小児・ICU担当)

卒業大学：東京慈恵会医科大学

経歴：

1990年 九州大学医学部附属病院、福岡市立こども病院心臓血管外科

1991年 九州厚生年金病院、外科、麻酔科、心臓血管外科

1993年 麻生病院 心臓血管外科

1994年 九州大学医学部附属病院心臓外科、研究室

1997年 九州厚生年金病院、心臓血管外科

1998年 クリーブランドクリニックBiomedical Engineering Research Fellow

2001年 北九州市立医療センター心臓血管外科

2002年 九州厚生年金病院 心臓血管外科部長

2010年よりJCHO九州病院 (旧：九州厚生年金病院) 心臓血管外科部長 (小児・ICU担当)

趣味：クラシック、ポップス音楽、海外ドラマ鑑賞、料理、ワイン

好きな言葉：至誠、大局観、Courage